

# 半国守護と守護代本折氏

南北朝初期の建武二年（一三三五）九月、富樫高家が足利尊氏から勲功の賞

として加賀守護に補任された。その後、氏春・昌家と三代約五〇年間にわたり、

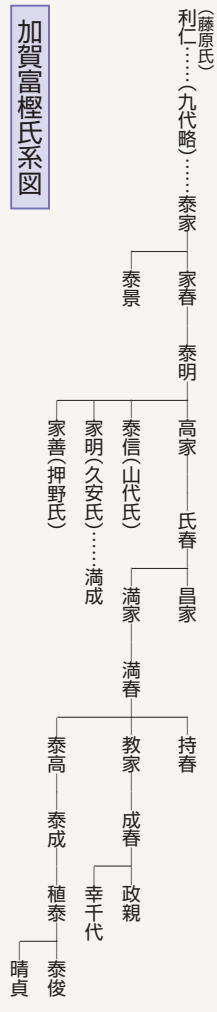
## 室町期の加賀国守護補任表

斯波義種	? ← 明德4 (1393) · 7·10 — 応永15 (1408) · 2·2
斯波満種	? ← 応永15 (1408) · 2 — 同21 (1414) · 6
富樫満成 (北半国)	
富樫満春 (南半国)	応永21 (1414) · 6·8 — 同25 (1418) · 11·22
富樫満春	応永25 (1418) · 11·22 — 同34 (1427) · 6·9
富樫持春	応永34 (1427) · 6 — 永享5 (1433) · ⑦ · 10
富樫教家	永享5 (1433) · ⑦ — 嘉吉元 (1441) · 6·18
富樫泰高	嘉吉元 (1441) · 6 — 文安4 (1447) · 5
富樫成春 (北半国)	文安4 (1447) · 5·17 — 長祿2 (1458) · 8
富樫泰高 (南半国)	文安4 (1447) · 5·17 — 寛正5 (1464) · 8·7
赤松政則 (北半国)	長祿2 (1458) · 8·30 — 文明初年 (1469) 頃
富樫政親 (南半国)	寛正5 (1464) · 8 → ?
富樫政親	? ← 文明6 (1474) — 長享2 (1488) · 6·8 (または9)

○付数字は閏月を示す (『書府太郎・下巻』北国新聞社刊に拠る)

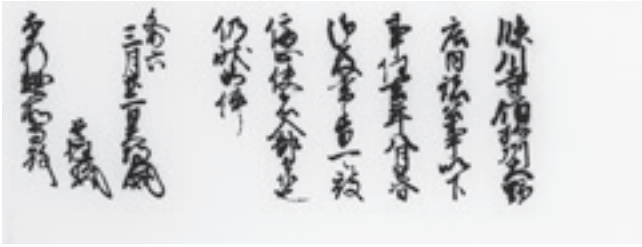
富樫氏の守護支配が進展したが、昌家の死後、室町幕府管領斯波義将の弟義種に、守護の地位が移った。やがて室町前期の応永二十一年（一四一四）に至り、斯波氏に代わって富樫満春が能美・江

### 加賀富樫氏系図

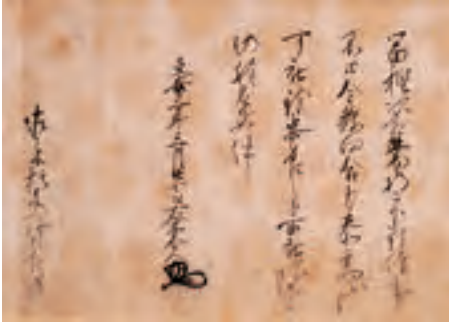


中世に北陸道筋の本折村鎮守であった本折日吉神社(山王社)

沼の南加賀二郡、將軍足利義持の近習であった庶流の満成(久安氏)が、石川・河北の北加賀二郡のそれぞれ加賀の半国守護に補任され、富樫一門の失地回復がはかられた。このとき南加賀



文安6年(1449)3月22日付加賀北半国守護富樫成春書下(京都市 天龍寺所蔵) 守護代となった本折越前守に充てた



文安3年(1446)3月27日付室町將軍家御教書(国立公文書館所蔵) 細川勝元が富樫成春・本折以下の討伐を命じた。

の守護所がどこに置かれたかは定かでないが、以後、当市域の本折村を出身地とする本折氏が、富樫氏の有力被官としてみえることから、北陸道の要衝で南加賀流通の拠点でもあった、能美郡本折付近(現小松市街地)に所在した可能性が高い。

応永二十五年十二月、北半国守護の富樫満成が將軍義持の怒りを買って逐電すると、南半国守護であった満春は、その地位を受け継ぎ、加賀一國守護となった。やがて守護職を継いだ満春の嫡男持春が、二一歳で死去する

と、持春の弟教家(満春次男)が守護に就任した。しかし教家も、嘉吉元年(一四四二)六月に、將軍足利義教の逆鱗に触れて失踪したため、醍醐寺三寶院の稚児となっていた教家の弟慶千代丸が、管領細川持之を烏帽子親として還俗し、泰高と名乗って守護に就任した。

ところがその六日後に、將軍義教が京都の赤松満祐邸で殺害されたため、出奔していた教家が、幕閣の重鎮である畠山持国を頼んで加賀守護への復帰を企てることになる。同年十二月になつて、教家方の主力をなす本折但馬入道父子の軍勢が、京都から加賀に攻め入り、泰高方の在国の守護代山川家之勢と三度合戦に及び、激しい攻防を繰り返したが、やがて山川方が勝利し、本折父子の加賀入国作戦は頓挫した。

しかし翌嘉吉二年に畠山持国が幕府管領になると、教家の子息龜童丸(成春)が加賀守護に補任された。本折但馬入道は、このとき守護代として分国経営を担うことになつたと思われる。

ついで文安二年(一四四五)三月、細川勝元が管領に就任すると、翌四月、泰高が守護に復帰した。だが龜童丸方はこれに応じず、引き続き加賀国を占拠し続けたため、泰高の守護代山川近江守が加賀への入部を企てたが、十月十七日、越前国境付近の江沼郡橋(現加賀市橋町)の合戦で、教家方の本折勢によつて撃退された。その後も同年暮から翌三年七月にかけて、管領細川勝元は、不法に加賀を占拠し続ける成春・本折氏等の追討を泰高に命ずる一方で、幕府奉公衆の朽木高親や敷地家澄等に、泰高方への支援を求めていた。

ついで文安三年九月に至り、泰高は、本折方を越中に追つたが、翌十月、本折勢は再び加賀に攻め入り占領した。そのため同四年五月、幕府は龜童丸を北加賀、泰高を南加賀のそれぞれ半国守護に補任することで、両派の抗争の収拾をはかった。しかし加賀を実効支配していた成春(教家)党の本折氏らは、これに不満を持ち、事態の混迷は続いた。

(東四柳史明)